
儻過ぎる夢

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傳過ぎる夢

【Zコード】

N6183A

【作者名】

黒猫

【あらすじ】

失つてはならない人を失い、思い出す失われた記憶。こんなに愛しているのに・・・何故忘れていたのだろう?ある夫婦の悲しい別れ。あなたは愛する人を最後まで信じれますか?

「・・・死んだ?」

受話器からその言葉を聞いた瞬間、頭が白くなる。

『ああ・・・今、苅谷総合病院にいる。そこで・・・信也が眠っているよ』

淡々と告げてくるその声には、感情と言つものが感じられない。

・・夫が死んだ。

正確には元・夫。

離婚してまだ一週間も経つてはいない。

愛してなんかいない。むしろ嫌いだ。離婚したのだから・・・。

なのに何故・・・何故こんなにも悲しいのだろう?

私は溢れ出す涙を拭うことも出来ず、突如襲つた喪失感に、足元が覚束なくなつた。受話器からはまだ声がするが耳に入らない。

元・夫・・・信也と言う人物を私は知らない。

おかしいかも知れないけれど本当の事だ。

何故なら・・・私には記憶がない。正確に言えば、彼と出会つてから今までの一年間の記憶がない。

私と彼は半月前に結婚したらしい。

そして結婚式の翌日・・・私は記憶を失つた。理由はわからない。

今だ結婚していた事すら信じられないくらいだ。

朝起きたら、隣に見知らぬ男が裸で寝ている。

自分が何処にいるのかもわからない。

あれほどパニックになつたのは初めてだ。震え・戸惑い、彼をひっぱたき罵倒し・・・泣き叫んだ。

彼は必死に私を慰めようとしたが、お人よしそうな優しい風貌が逆に恐ろしく見えてたまらなかつた。

暫くして落ち着くと、左手の薬指にはめている覚えのない指輪に気付いた。私がそれを眺めていると、彼が話を始めた。結婚してい

ると。

信じられなかつたが、二人の今までの写真や結婚式の写真を見せられて、最後には今の中まで言われば観念するしかなかつた。念のために両親や友人にも確かめたが偽りはなかつた。勿論病院の先生にも。

しかし、だからと言つて到底受け入れられる話ではない。

見知らぬ男と知らない内に結婚し、これから一緒にいなければならないのだ。励まそうとしたのか、落ち込む私の肩を抱こうとした彼の腕を、私は叩いて拒否した。

冗談ではない・・・愛してもいな相手に触れらるなんてごめんだ。夫婦となれば性生活もある。

私の頭と心は、恐怖と嫌悪感でいっぱいになつた。

大体・・・私は好きな人がいる。・・・一年経つているらしいけど、関係ない。なのに、なぜこんな奴なんかとッ！？

そう思つた私は、彼にその事を告げたが、ただ笑つてはいるだけだつた。

それに腹がたち私がどれだけ、その人の事を愛してはいるか、どれだけ信也と違いかつこよくて素敵かを切々と語つた。

それでもただ笑つてはいるだけの彼に理解出来ないでいると、彼はただ一言

「愛している」

と言い、私を抱きしめた。その瞬間・・私は彼を突き放し、家を出て行つた。

家を出た後、私は実家に戻る事にした。

行く宛てなどそこにしかないのだから。

両親は必死で私を諭し、説得しようとしたが、私は受け付けなかつた。

あんな男の元へ戻るなどごめんだ。世間から見れば、私は単なる我が儘娘かも知れないけれど、そんなの関係ない。私には、片思いだけれど他に好きな人がいて、その人と結ばれる事を夢見てはいる。そ

れが一年前の記憶だとして、私にとっては、今の現実なのだから。馴れ馴れしく抱きしめ、愛を語る男の所へなんて、死んでも嫌だ。そもそも、全然好みではないのだ。

確かに人は良さそうだが、顔はたいしたことはない。パツと見て、人が良さそうと言つだけで見知らぬ人と過ごせるわけがない。

性生活はあるか、触れるのも会話をするのも嫌だ。

キツイかも知れないが、私は変に潔癖な所がある。だから余計、性格上無理なのだ。両親の説得を無視し、部屋に閉じこもつた私に諦めたのか、それ以上は何も言わず彼に謝りの電話を入れたみたいだった。電話の声を遠くに聞きながら、指輪を抜き適当に投げ捨てる

とベットに倒れ込み眠りについた。

翌日、私の好きな人が結婚している事を知った。

落ち込む私に信也は、毎日のように実家に足を運んできた。もちろん私は相手にしない。すると携帯に電話やメールがくる。私は受着信拒否の設定をし、それを防いだ。なのに、しつこく足を運ぶ彼に私は我慢出来ず、ストーカーとして訴えると彼に叫んだ。

呆然とする彼だつたが、知つた事ではない。

毎日毎日恐いのだ。あまりのしつこさに嫌悪感しか浮かばない。

八つ当たりかも知れないが、信也のせいで大好きな彼と結ばれなかつたと思うと余計に嫌になる。

悪口雑言を浴びせ掛けていると、立ち直つたのか、また薄ら笑いを浮かべ

「ごめん」

と言い彼は去つて行つた。何を言つても笑う彼は正直理解出来ない存在だ。

三日後 - - 手紙と一緒に離婚届けが届いた。

手紙の内容は、私への謝罪と身の回りの物・・・彼にとつての思い出の品を処分したと言う内容だった。

私にとつては嬉しい報告だ。離婚できるし、何より写真とか処分してくれたのだ。私の知らない所で、私の写真等が彼に見られるのは

気持ち悪い事なのだから。

とにかく、こうして離婚した。

結婚して半月。一緒にくらしたのは僅か一夜だけ・・・しかも記憶がないのだから零に等しい。

落ち着くと、少しだけ罪悪感が生まれたが結局何も知らない相手だからと気にしないことした。

そして今日。今・

『泣いてるのか？・・・なんで泣くんだよッ！？裏切り者がツ！！』
受話器から聞こえる罵倒に、意識を取り戻す。

「そう裏切り者だ。私は彼を裏切った。

「うひ・・・うわあああッ！――！」

頭に溢れ出す、彼との記憶。同時に涙と声も溢れ出す。

『まさか・・・思い出したのか・・・？』

戸惑いかれられるその声に、更に涙が溢れる。
どうして忘れていたのだろう・・・。

こんなにも愛しているのに。

切なくて苦しくて痛くて、私はおかしくなりそうだ。涙を止める事

なく私は受話器を下ろすと、病院に駆け込んだ。

信じられないくらいおだやかな顔。ただ寝ているだけみたいな。

死因は交通事故。

子犬を助けようとしたらしい。

優し過ぎる彼らしい最後。どんなに辛くても悲しくても、笑顔を絶やさない彼。そんな彼を愛しく想い、素顔を知りたくて・・・私に甘えて欲しくて。

・・・なのに、私は裏切った。

彼には身寄りがない。

天涯孤独だ。

笑いの絶えない家族を持つのが夢だと言っていた。

今まで付き合つた恋人は、皆浮気をするなりして彼を裏切り離れて行つた。

私は絶対裏切らない、貴方を守ると誓つたのに・・・守ると誓つた時の貴方の嬉しそうな笑顔が頭から離れない。

愛している。愛している。愛しているのに・・・。

「「めんなさい。・・・」」めんなさい

彼の寝顔に、それしか言えない。他に何が言えると言つるのだろうか？崩れ落ちる私を、追い掛けで来た両親が優しく抱きしめた。両親もまた泣いていた。

私のせいだと、泣き叫ぶ私を両親は、ただただ優しく抱きしめるだけだった。

家に帰り、私は部屋を搔き回す。探し物は結婚指輪。もうこれしか信也との間にある物はない。他は全て処分したのだから。

中々見付からず、また泣き出した私の目に光りが与る。ベットの下に腕を伸ばすと見付かった、今の私にとって命より大切な指輪。

指輪の裏に彫られてある彼の名前を見て、胸が張り裂けそうになる。・・・いつそうの事張り裂ければ良いのに。

指輪を定位置に嵌め私は思つ。

彼の人生は何だったのだろう・・・？

身寄りはなく、愛する人にことごとく裏切られ、やつと夢見ていて家族を手に入れたのに・・・一夜で失つた、儚過ぎる夢。なのに、彼は最後までやはり笑顔で・・・。

幸せってなんだろう？

どうして私が生きていて、誰より優しくて、幸福にならなければならぬ彼が死んだのだろう・・・？

どうして記憶を失つた？

何故彼から離れた？

彼は不幸な人生だったのだろうか・・・？

あの笑顔の下で涙を流してたのだろうか？

きっと流していた。素顔を私に見せる事なく。

・・・もうどうでも良い。彼がいない世界など・・・

泣きつかれた私は、ベットに寝転がる。

すぐに訪れる睡魔に、意識を奪われる瞬間 - -

この記憶こそ偽りであるようにと、神様に祈り眠りについた。

目が醒めると、当たり前のように彼との生活が始まる事を信じて - -

(後書き)

どうも黒猫です。めあせめあせ暗い話です。書いてて気付きました（へへ）連載してた「ひぶ・ぱら」は、馬鹿みたいに下品なギヤグものなのに。とにかく感想下されーお願いします。マジで・・・では待つてます（^o^）～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6183a/>

夢過ぎる夢

2010年10月10日00時37分発行